國學院大學学術情報リポジトリ

ギラルドゥス・カンブレンシスと「大司教座セント・デイヴィズ教会」

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 永井, 一郎 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001049

研究ノート

ギラルドゥス・カンブレンシスと「大司教座セント・デイヴィズ教会」

永井　一郎

▶ 要　旨

中世ウェールズを代表する文筆家であるギラルドゥス・カンブレンシスは1199年に所属するセント・デイヴィズ教会メンバーから次期司教に推挙されたが，イングランド王ジョンによって拒否された。そこで彼は，王宮の頭越しにローマ教皇インノケンティウス三世に訴え出て，自分の司教就任と教会の大司教座権の回復を認めるよう要請した。

本稿で私は，この大胆な作戦がいつどのようにつくられたのかを探るために，彼が1190年代前半に発表した著作『ウェールズ旅行記』と『セント・デイヴィズ大司教聖デイヴィッド伝』を検討した。後者についてはその原本であるリギヴァルフの『聖デイヴィッド伝』も取り上げて比較した。

ギラルドゥスは2つの著作の中で，対決すべきイングランド王宮の論理，すなわち，ウェールズの教会は王権の支配下にあり，その司教は王が任命し，カンタベリー大司教の聖別を受けるという慣習が成立しているという主張には触れず，リギヴァルフの時代から南ウェールズで共有されていた主張，すなわち，ウェールズの教会，特にセント・デイヴィズ教会はイングランドの教会よりも古い伝統を持っているのだから，カンタベリー教会に服従する必要がないという論理を繰り返している。

したがって，彼の提訴の首尾は教皇が彼の論理を受け入れてくれるかどうかにかかっていた。王権を敵にまわす危険を承知しながら，彼は教皇の判断にかけたのである。

▶ キーワード

ギラルドゥス・カンブレンシス，リギヴァルフ，『ウェールズ旅行記』，『セント・デイヴィズ大司教聖デイヴィッド伝』，『聖デイヴィッド伝』

目次

Ⅰ　はじめに
Ⅱ　準備作業
Ⅲ　リギヴァルフの『聖デイヴィッド伝』
Ⅳ　『ウェールズ旅行記』
Ⅴ　『セント・デイヴィズ大司教聖デイヴィッド伝』
Ⅵ　おわりに

Ⅰ　はじめに

ギラルドゥス・カンブレンシス（Giraldus Cambrensis，本名はGiraldus de Barri，英語表記はGerald of Wales）は中世ウェールズを代表する聖職の文筆家である。生涯を通じて多くの著作を発表する一方，イングランド王宮を中心に政治世界でも活躍した。活動の中では1199年から1203年にかけて繰り広げた「セント・デイヴィズ（St. Dzvid's）問題」がよく知られている。これは，彼が自らのセント・デイヴィズ司教就任と同教会の大司教座権の回復を求めてローマ教皇に提訴し，イングランド王宮を相手に展開した激しい論争である(1)。

本稿は，ギラルドゥスが「セント・デイヴィズ問題」を提起する前に何を考え，準備していたのかを探るひとつの試みである。年代でいえばほぼ1190年代前半である。先行拙稿で触れたように，1190年代のギラルドゥスの活動は，何点かの著作の執筆・発表は別として，よく分かっていない。というのは，彼は生涯の各時期について自ら語っているのであるが，この時期の行動にほとんど触れていないからである(2)。

しかし，彼は1190年代を無為に過ごしていたのではない。この点を説明するためには，彼の経歴を簡単に追ってみるのが便宜である(3)。

ギラルドゥスは1145年ないし46年にアングロ・ノルマン貴族の父と部分的に南ウェールズ王家の血統を引く母との間に生まれ，アングロ・ノルマン貴族の子弟として養育された。成人後彼は1165年から10年間パリに留学し，そこで故郷のセント・デイヴィズ教会の司教になるという生涯の目標を定めた。帰国した彼はカンタベリー大司教の支援を受けて故郷の教会改革に力を注ぎ，2年間で大きな成果を上げた。また，教会メンバーの信頼を得た彼は次期司教と目されるまでになった。

1176年に伯父である司教デイヴィッド（David FitzGerald）が死去すると，教会はギラルドゥスを次期司教に推挙した。しかし，最終決定権を持つヘンリ二世はこれを却下した。王は，ギラルドゥスに南ウェールズ聖界をリードする地位を与えると血縁者であるウェールズ人支配者たちと結託して，自分のウェールズ政策を妨害するのではないかと危惧したのである。ギラルドゥスはアングロ・ノルマン貴族であると自覚し，王の忠実な家臣と自認していたから，王の危惧は全くの誤解であると抗議したかっただろう。しかし，一度下された主君の判断を覆すのは難しく，また，セント・デイヴィズ司教になるという生涯の目標をあきらめる気持ちはまったくなかった。そこで，彼はこれまでとは違った作戦が必要であると考えた。

ギラルドゥスは1177年から79年にかけて再度パリに留学し，教会法の研究を進めながら，生涯目標を実現する新しいプランをつくった。ヘンリ二世に対して自分が忠実かつ有能な従者であることを具体的な行動で示し，王の誤解を解く作戦である。帰国した彼はその機会をうかがっていたが，1184年に絶好のチャンスが到来した。当時ウェールズ政策で苦労していたヘンリ二世が彼を王宮付き司祭に任命して，ウェールズ人支配者たちとの仲介役を務めるよう命じたのである。

以後彼は5年間熱心に王に仕え，王の誤解を解こうとした。しかし，期待に反して王はギラルドゥスに対する疑念を最後まで緩めず，1189年に死去した。その後も彼は次王リチャード一世に命じられて職務を続けたが，成果のないまま1191年に王宮を辞した。第2の作戦も失敗である。

しかし，ギラルドゥスはセント・デイヴィズ司教になる夢をあきらめなかった。再度作戦を立て直して初志を貫徹しようという強い気持ちを持ち続けていたことは1199年に「セント・デイヴィズ問題」を提起したことから明らかである。彼は新しく，自分の願望をセント・デイヴィズ教会が以前から持っていた大司教座回復の夢と組み合わせて，イングランド王権の頭越しにローマ教皇に訴え出るという作戦を立てた。これまでに比べてはるかに大胆であり，また，主君の意図や利益に反するものであったから，着想から具体的な行動計画を組み上げるまでに時間を要した。

私はこの計画が練られたのが1190年代中葉であったと推測している。

本稿の目的は，彼がどのように新しいプランの準備を進めたのか，同時期に書かれた彼の著作を手掛かりに探ってみることにある。

Ⅱ　準備作業

史料の検討に先立って，本節で3つの準備作業を済ませておこう。

第1はセント・デイヴィズ教会と聖デイヴィッド（St. David，ウェールズ語でDewi Sant）に関する簡単な説明である。ただし，本稿のテーマに合わせて，時代は12世紀までとする。

セント・デイヴィズ教会はウェールズ南西部ダヴェッド（Dyfed）の最西端，セント・デイヴィズの町にあり，湾に面した丘陵に埋もれるように建てられている。ウェールズにある4つの司教座教会の中で最高の権威をもち，今日でも多くの信徒や観光客を集めている。

聖デイヴィッドが南西ウェールズで布教し，多くの信徒を得たのは6世紀後半であり，死後60年ほどして彼に捧げる最初の教会が創建された(4)。今日彼の名を冠した教会や地名が多数残されており，その分布から判断すると主要な活動範囲はダヴェッドとその北側のケレディギオン（Ceredigion）であったと推定される。しかし，弟子たちの時代になると布教の場はアイルランド，ブルターニュにまで拡大したようで，これを示す地名や遺跡が残されている。弟子たちがブリテン島よりも海外に向かったのはセント・デイヴィズが古くから航路の結節点だったからである。

セント・デイヴィズとその周辺は先史時代から人々が居住していたようで，聖なる泉などいくつか遺跡が確認されている。最初期のキリスト教布教はしばしば異教の聖地を利用して拠点を築いており，セント・デイヴィズ教会についても同様に考えてよいであろう。

7，8世紀のセント・デイヴィズ教会はまだダヴェッドの7つの教会のひとつに過ぎなかったが，その後勢力を拡大し，11世紀前半にはウェールズ最高の権威を誇る教会になっている。この点は，11世紀の教皇カリクトゥスが同教会を巡礼地に指定していることから明らかである。以後，セント・デイヴィズ教会はブリテン島各地やアイルランドから巡礼者が集う場，その意味でウェールズの枠を超えた権威を誇る聖地となった。なお，この教会へ2度巡礼すれば，ローマ巡礼1回に相当するとみなされていた。

11世紀後半になると，ケレディギオンを根拠地としたデハイバース（Deheubarth）王国を興して南西ウェールズを統一したリース・アプ・テウドル（Rhys ap Tewdr）がセント・デイヴィズを中心とする地域，ペピディオグ（Pebidiog）全体をセント・デイヴィズ教会に寄進し，以後この地域は聖デイヴィッドの名をとってデウィスランド（Dewisland）と呼ばれるようになった。この教会は南西部ウェールズの支配者にとってぜひとも利用したい権威をもっていたのである。寄進が同教会の経済力増大につながったことは言うまでもない。

おそらく11世紀のセント・デイヴィズ教会は宗教的権威，世俗的支配力いずれの面でもひとつのピークを迎えていたと思われる。12世紀末にギラルドゥスは同教会がかつて持っていた栄光をしのんでいるが，それは100年ほど前の，まだかなり鮮明な記憶だったであろう。

しかし，栄光の時は長続きしなかった。12世紀初頭からヘンリ一世がウェールズへ軍を進め，南西部ではペンブローク（Pembroke）に軍事・政治的拠点を築いた。さらに，セント・デイヴィズ教会にとってはこのほうが重大事だったのであるが，王権はウェールズにイングランドと同様な聖界組織を導入しようと計画し，まず，南東部で勢力をもっていたサンダフ（Llandaff）教会に王が任命した司教を送り込んだ。セント・デイヴィズ教会は同様な動きが自分たちにも及ぶことを恐れ，これが次節で取り上げるリギヴァルフ

（Rhygyfarch）の『聖デイヴィッド伝（Vita Sancti Dauid）』執筆につながった。ただし，イングランド王権もこの教会が持つ力をよく承知していたようで，歴代の王が教会を訪れ，デウィスランドを引き続き教会領とするなどの配慮をしている。

最初の大聖堂建設が始まったのは1182年，司教ピーター・ド・レイア（Peter de Leia）の時代であり，彼の任期中に完成している。その後，1220年に塔が崩壊するなどして何度も改修と増築が繰り返され，18世紀の末にほぼ今日の姿となった。

12世紀になると南西ウェールズにおけるアングロ・ノルマン勢力はさらに増大し，ウェールズ人支配者たちは，形式的にではあっても，王の支配を受け入れざるを得なくなった。しかし，セント・デイヴィズ教会ではカンタベリー教会の支配を排除しようとする強い意識が共有されていたようで，これを利用したのが12世紀中葉の司教バーナード（Bernard）である(5)。

バーナードは王によって任命され，カンタベリー大司教に服従を誓った司教であったが，就任後しばらくして姿勢を変えた。自分の教会は古来大司教座であり，カンタベリー教会と同格であると主張し，これを確認してほしいとローマ教皇庁に訴え出たのである。教皇庁はこれを受け止め調査を開始したが，途中でバーナードが死去したため結論は出されなかった。しかし，バーナードの試みは半世紀後のギラルドゥスにとって，主張の内容，方法，根拠いずれの点でもいわばお手本となっている。

聖デイヴィッド自身に関する情報の大部分はリギヴァルフの『聖デイヴィッド伝』(6)を出典としており，その中には事実と考え難いものが多く含まれている。生前の彼の活動で事実と判断できるものはごくわずかで，6世紀後半にケレディギオンやダヴェッドで布教活動をして多くの弟子や信徒を集めたこと，弟子たちの活動も含めると彼の権威は南ウェールズからアイルランドやブルターニュにまで広がったこと，おそらく589年に死去したことで尽きている(7)。死後の事実では，彼の名が10世紀にアングロ・サクソンの侵攻に対抗するウェーズ人勢力の象徴として使われていること，11世紀にリギヴァルフが伝記をまとめたことが重要である。

第2の準備作業は本稿が利用する史料に関する説明である。

本稿は3つの史料，ギラルドゥスの『ウェールズ旅行記（Itinerarium Kambriae）』(8)，同じく『セント・デイヴィズ大司教聖デイヴィッド伝（De Vita S. Davidis Archiepiscopis）』(9)，および，リギヴァルフの『聖デイヴィッド伝』を取り上げて検討する。

『ウェールズ旅行記』は，1188年にウェールズで行われた第3回十字軍勧奨巡行の記録で，ギラルドゥスはカンタベリー大司教ボードウィン（Baldwin）を案内しながら各地で参加勧奨の説教を行っている。セント・デイヴィズ教会は巡行最大の目的地であったから，同書はこの教会の現状や歴史について詳しく述べている。具体的な内容は第4節で紹介す

る。

『ウェールズ旅行記』には3つの版があり，第1版は1191年ころに，第2版は1197年ころに，第3版は1214年ころに書かれている。3版ともギラルドゥス自身がまとめたもので彼の執筆意図を直接反映している。ただし，1190年代中葉のギラルドゥスをテーマとする本稿が利用するのは第1版であり，他の2つの版はこれとの相違に注目する。

現在使われている校訂本は150年前にディモック（Dimock，J. F.）が編纂したもので，底本は第3版のマニュスクリプト British Library，MS. Cotton，Domit. I（記号R）である。ディモックは改定を重ねた最終版が最もよく著者の意図を表していると判断したのであるが，本稿のように第1版を利用する場合には不都合である。脚註に先行版の異文が記されているので，それを手掛かりに第1版を復元することもできるが，大変な手間がかかる。ただ，幸いなことにディモックの校本を英訳したソープ（Thorpe，L.）が第2，第3の追加部分を付録にまとめ(10)，また，少数の削除は註で明記している。そこで，本稿はソープの英訳本によって利用する記述が第1版に含まれているか確認することにした。

『セント・デイヴィズ大司教聖デイヴィッド伝』（以下『大司教聖デイヴィッド伝』と略記）は古い聖人をたたえる単なる伝記ではなく，明確な政治的意図，すなわち，セント・デイヴィズ教会は本来大司教座であるという主張を込めた著作である。この点が本稿の眼目であり，第5節で検討する。

同書はウオートン（Wharton，H.）の校訂本としてのみ残されている。底本マニュスクリプトは現存しない British Library，MS. Cotton，Vitellius E vii である(11)。このように史料状況は決してよくないが，ギラルドゥスはが何度も言及していることから判断して(12)，彼がこの校本の原本を1194年ころに書いたことは間違いない。現在用いられている校本はブリューワー（Brewer，J. S.）が編纂したもので，簡単に利用できる英訳は，私の知る限りであるが，ない。

リギヴァルフが11世紀末に書いた『聖デイヴィッド伝』については，3点に分けて説明する。

第1は，この伝記とギラルドゥスとの関係についてである。

同じく聖デイヴィッドの伝記とはいえ，本稿がギラルドゥスより1世紀ほど前の著作を取り上げるのは，彼自身がリギヴァルフの伝記を基にしてその翻案をしたと記しているからである(13)。『聖デイヴィッド伝』は11世紀以降セント・デイヴィズ教会に保存され，重要なミサでその末尾部分が朗読されていた可能性が高く(14)，彼にとって親しい文献であった。実際，『大司教聖デイヴィッド伝』と『聖デイヴィッド伝』の内容や構成はよく似ており，しかも，両者を比較すると彼の改訂意図と思われるものがいくつか浮かび上がってくる。これは前者を単独で読む場合には得られない情報であり，対比のために『聖デ

イヴィッド伝』をそれとして取り上げる価値がある。

第2に，リギヴァルフが『聖デイヴィッド伝』を書いた背景について簡潔にまとめておこう。

リギヴァルフは11世紀後半にウェールズ中西部のサンバダルン（Llanbadarn）修道院で活躍した伝統的な学者・聖職者である(15)。父シリエン（Sulien）はセント・デイヴィズ司教に2度就任するなど南西ウェールズの聖界で大きな権威をもち，この地域の王リース・アプ・テウドルの支援を受けていた。前述のようにセント・デイヴィズ教会がもっとも繁栄していた時期である。しかし，11世紀末になると2人の支配者は大きな問題，すなわち，アングロ・ノルマン勢力の西進をいかに阻止するかという問題に直面した。特にリースがウィリアム一世に忠誠を誓って南西ウェールズの支配権を保証される状況に追いつめられると，同様な位置づけが聖界でもなされる危険性が高まった。

シリエンはこれに危機感をいだき，セント・デイヴィズ教会はカンタベリー教会に代表されるイングランドの教会よりも古い起源を持ち，独自の権威を保持してきたことを史料に基づき明示する必要があると考えた。そこで，彼は息子リギヴァルフにセント・デイヴィズ教会の創設者である聖デイヴィッドの伝記をまとめ，聖人が生存中に全ウェールズ人の推挙によって大司教の地位についたことを明示するように依頼した。6世紀に実在していた聖デイヴィッドが大司教であったならば，それはイングランドで教会組織が作られる前のことであり，その後今日までその地位が失われていない，したがって，セント・デイヴィズ教会はカンタベリー教会に従属すべきではない，という論理である。

リギヴァルフは伝承を中心に多様な情報を集め，間もなく充実した『聖デイヴィッド伝』を書きあげた。今日でも聖デイヴィドやセント・デイヴィズ教会を研究する者はまず目を通すべき基礎史料である。

第3の説明は史料状況についてである。

『聖デイヴィッド伝』の現存マニュスクリプトは大きく2つの版に分かれる。ヴェスパシアン（Vespasian）版とネロ・ディグビー（Nero–Digby）版である(16)。両者の位置づけはここ数年で大きく変動しており，最近になって前者がオリジナル，後者はその圧縮版であることがはっきりした。

問題はギラルドゥスがどちらの版を見ていたかであり，この点は本稿が利用すべき版とかかわる。ジェイムズ（James, J. W.）は，ネロ・ディグビー版の校訂本の中で，ギラルドゥスはこの版を基に翻案したと述べている(17)。これに対してシャープ（Sharpe, R.）は，ネロ・ディグビー版の現存マニュスクリプトがすべてウェールズ外で所蔵されていたことを指摘して，ジェイムズの判断を疑問視している(18)。私は，ギラルドゥスがセント・デイヴィズ教会のために書かれ，大切に保存されていたオリジナル版を見ていたこと

は間違いないと考えて，本稿ではシャープ（Sharpe，R.）とデイヴィス（Davies，J. R.）による最新の校本「リギヴァルフの聖デイヴィッド伝（Rygyfarch's Life of St. David)」を利用することにした[19]。情報量から言ってもこれが自然な判断であろう。具体的な内容は第3節で紹介する。

準備作業の最後に，本稿にとって重要な意味を持つ先行研究を2点紹介する[20]。

第1は，2007年刊行の『ウェールズの聖デイヴィッド－崇拝，教会，民族（St. David of Wales，Cult，Church and Nation)』所収のエヴァンス（Evans，J. W.）の論文「移行と存続，聖デイヴィッドとセント・デイヴィズ大聖堂（Transition and Survival：St. David and St. David's Cathedral)」である[21]。この論文は，時代をさかのぼりながら人々の聖デイヴィッドに対する崇敬の念がセント・デイヴィズ教会の興亡にどのような影響を与えたか分析したものである。

本稿にとって重要な論点を挙げれば，6世紀に聖デイヴィッドが活躍し，その足跡が残っているところは必ずしもセント・デイヴィズ教会の支配域と重ならないこと，両者を結びつけたのがリギヴァルフとギラルドゥスの伝記であること，両書はともにイングランド勢力のウェールズ侵攻を念頭に置いて執筆されたことである。これらの論点は第5節で利用する。

第2の先行研究は2018年に出版された『ジェラルド・オヴ・ウェールズ－中世の文筆家・評論家に関する新しい展望（Gerald of Wales，New Perspective on a Medieval Writer and Critic)』所収のプライス（Pryce，H.）の論文，「ジェラルド・オヴ・ウェールズとウェールズの歴史（Gerald of Wales and the Welsh Past)」である[22]。

ここでプライスは，ギラルドゥスの著作を自在に引用しながら，そこに浮かび上がるウェールズ史像を明らかにしている。ただし，プライスは通史的な発想をしているのではなく，ギラルドゥスが12世紀までのウェールズ人にとって重要な画期となった事件や状況をどのように記述しているかに関心を集中しており，そのひとつがセント・デイヴィズ教会の大司教座回復の試みである。

本稿に引き付けてプライスの論点を簡潔にまとめると，次の2点である。①ギラルドゥスの伝記をリギヴァルフのそれと比較すれば，そこから彼の独自の歴史理解を抽出できる。②この歴史理解を当時彼がおかれていた状況と照らし合わせると，彼の執筆意図が浮かび上がってくる。

この論文は，タイトルから分かるように①に多くの力を注いでいて，②を主目的とする本稿とのずれはあるが，それでも大変重要な示唆を与えてくれる。これも第5節で利用する。

最後に，本稿が先行拙稿とのどのように関係しているかごく簡単に触れておこう。「セ

ント・デイヴィズ問題」提起の準備過程である点で本稿は「ギラルドゥス・カンブレンシスと『セント・デイヴィズ問題』」[23]と直接つながっている。また，本稿がギラルドゥスの生涯の一時期を扱っている点から言えば，拙稿，「ギラルドゥス・カンブレンシスのキャリア・デザイン」，「ギラルドゥス・カンブレンシスと『ブレコン大助祭問題』」[24]と同じグループに属する。また，1190年代にギラルドゥスが持っていた思考や認識を探るという点では「『ウェールズ旅行記』に見られるギラルドゥス・カンブレンシスの政治的スタンス」，「『君主の訓育』第1巻を読む－1190年代前半のギラルドゥス・カンブレンシス」に続く試論である[25]。

Ⅲ　リギヴァルフの『聖デイヴィッド伝』

本節はリギヴァルフの『聖デイヴィッド伝』の要旨をヴェスパシアン版に従って紹介し，彼がどのようにセント・デイヴィズ教会の大司教座権を主張しているか検証する。

この伝記は本文が68節に分かれ，これに前文，末文，付録がついている。ただし，以下では内容のつながりを考えて本文を13の部分にまとめてある。また，大司教座に関する記述は詳しく，他の記述はごく簡潔に紹介する。

〈前文〉

「司教，証聖者である聖デイヴィッドの伝記がここに始まる。」[26]

〈第1～第6節〉

聖デイヴィッドの生誕は早くからケレディギオンの王サンクトゥス（Sanctus）や聖パトリキウス（Patricius）に告知されていた。聖パトリキウスは神の指示に従ってウェールズの布教を30年後に生まれる聖デイヴィッドに譲ることにし，アイルランドへもどった。

父サンクトゥスはノニタ（Nonita）という修道女を略奪して結婚し，聖デイヴィッドをもうけた。聖ギルダス（Gildas）は妊娠中のノニタの前で言葉を失い，生まれてくる聖デイヴィッドに全ブリテンの布教を委ねることにした。

聖デイヴィッドの生誕地に教会が建てられた[27]。

〈第7～第14節〉

聖デイヴィッドはマンスター（Munster）の司教によって洗礼を受け，ヴェトゥス・ルゥベス（Vetus Rubes）で教育を受けて聖職についた。さらに，パウリヌス（Paulinus）の下で研鑽を積んだ。

聖デイヴィッドはブリテン各地を回って12の修道院を建設した。その後本拠地をヴェ

トゥス・ルゥベスに定めた[28]。

〈第15～第19節〉

聖デイヴィッドは天使の導きで，弟子たちとともに人里離れたヴァリス・ロシーナ（Vallis Rosina）へ行き，ここで神の名を唱えて火をたいた。この火を遠くに見つけた地域の支配者バイア（Baia）は彼らを侵入者とみなし，殺害しようとした。するとバイアは突然熱病にかかり，聖「デイヴィッドが永久にヴァリス・ロシーナを所有する」よう計らうと誓約してようやく回復できた。こうしてヴァリス・ロシーナが彼らの本拠地となった[29]。

〈第20～第32節〉

聖デイヴィッドと弟子はヴァリス・ロシーナに修道院を建設し，ここで祈りと労働の日々を送った。彼らは修道士の日課を定め，地位にかかわらず皆これを順守した。彼らは清貧を尊び，世俗財産を放棄して神に仕えた。

聖デイヴィッドとその修道院の名声が高まると，ブリテン各地の支配者たちが参加を願い出た[30]。

〈第33～第43節〉

聖デイヴィッドが生み出した奇跡。彼の修道院で起きた奇跡。彼の弟子たちがブリテンやアイルランドの布教先で経験した奇跡[31]。

〈第44～第48節〉

神の指示に従って聖デイヴィッドは弟子とともにエルサレムを訪れた。同地の総司教は聖「デイヴィッドが大司教の地位に就くようとり計らい」，また，聖遺物を贈った。彼らは帰国して修道院にその聖遺物を安置した[32]。

〈第49～第54節〉

ペラギウス派が台頭した時に，全ブリテンから司教が招集され異端制圧の会議が開かれた。118人の司教など聖・俗の支配者たちがブレヴィ（Brefi）という土地に集まり，代表者を決めることにした。積み上げた衣類を台にしてかわるがわる説教をし，最も強く参集者たちの心をつかんだ人を主席教会の大司教に選定するという方法をとったが，その台から参集者の耳に届く説教ができる人はいなかった。

そこで，聖パウリヌスが提案して，聖デイヴィッドを招いて説教してもらうことにした。彼は2度要請を断ったが，聖ドブリキウス（Dubricius）の説得によってブレヴィへ出発した。

会場につくと，聖デイヴィッドは何もない地面の上で神の教えを説き始めた。すると，彼の足元が盛り上がり，参集者全員に彼の姿が見えるようになった。参集者は彼の説教に感動し，「満場一致で彼を首都の大司教に推挙し，彼の修道院を全ブリテンの主席教会と

定めた。」この丘に今日教会が建てられている。

「以後だれであれ，この修道院を司る者は大司教の地位を持つことになった。」また，この修道院で守られていた規則を全ブリテンで順守されるべきものと決めた。この時聖デイヴィッド自身が書いた規律の文書がセント・デイヴィズ教会に残されている(33)。

〈第 55～第 58 節〉

後日「勝利の宗教会議（Synodus Victorie）」と名付けられた集会が開かれ，司教など多くの聖職者によってブレヴィの集会で決められたことが確認された。これら 2 つの集会を経て，我が国のすべての教会が「ローマ[教会]の権威を受け入れる」ことになった。以後これに従って各地に修道院が次々と建設され，組織や規律をよく知る人々が司教に任命された。

全ブリテンの世俗支配者たちが聖デイヴィッドの支配する修道院に免租特権やアジール権を与えた。

彼は全ブリテン住民の先頭に立つ指導者とみなされた。また，年を重ねる中で，彼は全ブリテン住民の長，この国の誉れと称えられるようになった(34)。

〈第 59～第 65 節〉

聖デイヴィッドの死は神によって予告された。彼は神に祈り，人々は悲しんだ。このニュースは全ブリテンとアイルランドに伝えられた。彼は多くの参集者の前で，自分が 3 月 1 日に死去すると告げ，この日が来ると天使に導かれて昇天した。神への祈り(35)。

〈第 66～第 67 節〉

私リギヴァルフは聖デイヴィッドの事績として伝えられている多くの事柄をひとつの著作にまとめた。彼に関する古い記録は国内各地に残されているが，中でも聖デイヴィッドの修道院に多く保管されている。私は微力を尽くしてこの伝記を書いた(36)。

〈第 68 節〉

「全ブリタニアの大司教聖デイヴィッド」の系譜(37)。

〈末文〉

司教，証聖者である聖デイヴィッドの伝記が終わる。

ミサに際して聖デイヴィッドに捧げる言葉(38)。

次に，上記の要旨から本稿にとって重要な意味を持つ点を挙げ，私の理解を記す。

(1)『聖デイヴィッド伝』でリギヴァルフは，聖デイヴィッドこそブリテンを代表する聖人であり，その聖界をリードする大司教にふさわしい人物であったと主張している。決して洗練された作品ではなく矛盾含みの個所もあるが，聖デイヴィッドが神に愛された特別の人であったと納得させる内容になっている。その意味で充実した作品である。引用さ

れている多くのエピソードは11世紀の人々に親しいものだったと推測されるので，読者に訴えかける力は今日よりはるかに大きかったであろう。

(2) 前節で紹介したように，『聖デイヴィッド伝』は単純な聖人伝ではなく，政治的な意図が込められた作品である。すなわち，神の導きによって聖デイヴィッドが創建したセント・デイヴィズ教会はその伝統，権威ともにイングランドの教会に勝っており，カンタベリー教会の配下に置かれるべきではないと主張することによって，南西ウェールズの人々を鼓舞する意図を持っていた。カンタベリー教会を引き合いに出してはいないが，聖デイヴィッドとその修道院・教会をたたえる表現の中に彼の意図は示されている。サリエンの期待に充分応える作品になっている。

(3) リギヴァルフは「全ブリテン」という表現をしばしば用いているが，これはブリテン島ではなくウェールズを指している。ウェールズで古くから見られるこの誇大表現は，現在自分たちは従属状態にあるが，いつかアーサー王などの救済者が出現し，ウェールズ人がブリテン島全体を治める時が来るという願望を表している。上の要旨ではこの点を考慮して原語どおりに訳した(39)。

(4) リギヴァルフは，聖デイヴィッドの生涯を追いながら「司教」と「大司教」の称号を使い分けている。すなわち，デイヴィッドは誕生前から神に祝福された人であったが，大司教として生まれたのではなく，多くの弟子を集め，奇跡を生み出す中で大司教の地位を得たという筋立てになっている。したがって，多様なエピソードの中で大司教就任の経緯が特に重要な意味を持っている。

(5) リギヴァルフは聖デイヴィッドが2度，まったく別の経緯で大司教になったと記している。これは本稿にとって重要な点であり，また，矛盾含みでもあるので，やや詳しく検討する必要がある。

ひとつは彼が弟子を伴ってエルサレムに巡礼した時で，この地の総司教から大司教の地位と聖遺物を与えられた。ただし，前節で紹介した聖デイヴィッドの活動範囲から判断すると，彼が実際にエルサレムを訪れたとは考え難い。もうひとつはブレヴィの集会で，ここで聖デイヴィッドは全ウェールズから集まった聖・俗有力者の一致した推挙によって主席教会の大司教の地位を得ている。

問題はリギヴァルフがこの2つの大司教就任をどのように位置付けているかである。先に出てくるのはエルサレムでの就任であるが，これが決定的な契機であれば，ブレヴィでの就任はいわば付けたりとなる。他方，状況説明の密度で比較すると，前者は任命されたことだけが記されているのに対して，後者は人々の動きから心理まで生き生きと表現されている。彼が強くイメージし，読者に伝えたかったのは明らかにブレヴィの集まりにおける大司教選出である。

（6）どちらの大司教像が当時のウェールズ人にとって親しみがあり，現実性を持っていたかと言えば，それはブレヴィの集まりで選定された大司教である。少し説明しよう。

ギラルドゥスによれば，ウェールズ古来の司教選出は，まず司教座教会のメンバーが候補を推挙しあって一人に絞り，その候補を他の教会の司教が聖別するという方法で行われた。セント・デイヴィズ教会の場合も同様であったが，教会間では優先的位置を持っていた。セント・デイヴィズ司教がいれば，彼が聖別者となったのである[40]。

現在の研究者も同様に考えていて，たとえばデイヴィスは次のように述べている。南西ウェールズでは5，6世紀に郡（カントレヴ，cantref）ごとに司教座教会が設けられたが，9世紀までにこの教会が緩やかな連合をつくり，そのリーダーを互選して重要な事項を決めるという慣習が出来上がっていた。そして，そのリーダーの姿を伝えているのが聖ドブリキウスであり，聖デイヴィッドである[41]。

こうした理解を踏まえると，リギヴァルフは南西ウェールズで古くから行われていた聖界指導者の選出方法をブレヴィの集まりという場で再現して見せたと言ってよい。実際にブレヴィの集まりが開かれたのかどうか確認できないが，聖・俗の有力者が集まって自分たちの聖界指導者を決めるのはリギヴァルフとその周囲の人々にとって現実性の高い，むしろ自然な方法だったであろう。

（7）リギヴァルフによれば，ブレヴィの集会で決められたことが後日「勝利の宗教会議」で確認され，それによってローマ教会の承認を得たことになっている。しかし，この部分の記事は承認が得られたと伝えているだけで，具体的な事情に触れていない。おそらく彼は，圧力を強めているイングランド王権がローマ教会の権威を後ろ盾にしていることを知っていて，何らかの形で教皇も聖デイヴィッドの地位を認めていると言いたかったのであろうが，成功していない。

（8）リギヴァルフは聖デイヴィッドが得た大司教の地位と権限が後継者に引き継がれ，その結果彼らの教会は大司教座となって人々の崇敬を集めていると記している。ただし，歴代の大司教の名を挙げていない。また，この大司教座が他に移されたという記述もない。

そこで，ひとつ疑問が生じる。それは，リギヴァルフの時代にセント・デイヴィズ教会は大司教座だったのかどうかという点である。

私は，南西ウェールズを統治していたリース・アプ・テウドルの強い支援を得ていたことから判断して，セント・デイヴィズ教会が周辺ウェールズ地域の教会に比べて優位に立ち，同教会の司教が取りまとめ役を担っていた可能性が高いと考える。前節で紹介したようにこの教会は11世紀にひとつのピークを迎えていたから，その司教が周辺の司教たちのリーダーとなってもおかしくない。これを大司教と呼ぶならばセント・デイヴィズ教会は大司教座であった。

ただし，これはローマ教会のヒエラルキーに位置付けられたカンタベリー教会の大司教座とは全く別の地位である。おそらくリギヴァルフはこの点に気づいていただろうが，ウェールズに残された古い文献や伝承に基づいてウェールズ人を鼓舞できれば自分の使命は果たされたと判断したのではないか。

Ⅳ　『ウェールズ旅行記』

本節はギラルドゥスの『ウェールズ旅行記』第2巻の序文と第1章の内容を紹介し(42)，1190年代初めに彼がセント・デイヴィズ教会の大司教座権についてどのような情報や判断を持っていたか確認する。

まず序文は，下記の要旨（4-1）から分かるように，第2巻全体というよりも続く第1章の導入部であり，なぜ彼がセント・デイヴィズ教会の歴史を取り上げるのか，その理由を述べている。

（4-1）「メネヴィア（Menevia，セント・デイヴィズ教会の別称）は今日でも確かにウェールズの中心地であるが，かつては大司教の首都[教会]であった。」現在この教会は過去の評価に大きく依存しており，もはや首都教会にふさわしい真の力を失っている。かつてこの教会は人々の崇敬を集める卓越した母教会であった。

私は死を迎えているようなこの教会の状況を眼前にして涙を抑えられない。そこで，できる限り簡潔にこの教会の歴史を読者に伝えておこうと考えた。すなわち，いつどのようにして大司教の祭服がこの教会にもたらされたのか，その後どのようにしてこの教会から持ち去られたのか，どれだけの高位聖職者がそれを身に着けたのかなど，今日までの経緯を記すことにした(43)。

見られるようにギラルドゥスの現状認識は悲観的である。しかし，彼は現状をそのまま受け入れて諦めていたわけではない。野心に満ち，この教会の司教就任を生涯の目標にしてきたギラルドゥスであれば当然のことであろう。ヘンリ二世に仕え，その愛顧を得て目標を達成しようとする計画で成果が得られず，作戦の立て直しに迫られた時に，目標の場であるセント・デイヴィズ教会の歴史を改めて確認するのはむしろ自然である。以後10年ほどの間に，彼はイングランド王宮との論争に必要な情報を教会の歴史から探る作業を繰り返し行っている。

次に，第1章「セント・デイヴィズ司教区」の内容を紹介する。

（4-2）「ブリタニアの歴史[書]は，この地の大司教であったドブリキウスがその高貴な

地位をカエルレオン（urbus Legoinis，ウェールズ名 Caerleon）で［聖］デイヴィッドに譲り，その後［この地位が聖］デイヴィッドによってメネヴィアに移されたことを伝えている。」

南ウェールズで首都にふさわしいのはカエルレオンであるが，聖デイヴィッドは修行に適した土地を求めてセント・デイヴィズに大司教座を置いた。

聖デイヴィッドは生涯を通じて信仰心篤く，聖人にふさわしい生活を送った。その証拠は「私の『聖デイヴィッド伝』に示されている。」この著作で多くの事績を紹介したが，中でも，神が聖デイヴィッドの生誕を 30 年前に予告したこと，サンゼウィ・ブレヴィ（Llanddewi Brefi）で彼が説教をした時に彼の足元が隆起したことは特に重要である(44)。

（4-3）聖デイヴィッド以降 25 人の大司教がセント・デイヴィズ教会を司った(45)。

（4-4）25 代目のサムソン（Samson）の時に大司教の祭服がセント・デイヴィズ教会を離れた。当時ウェールズは疫病に襲われ多数の死者が出たため，サムソンは大司教の祭服を持ってブルターニュに逃れ，この地のドル（Doll）で司教となったのである(46)。

（4-5）ウェールズがイングランド王ヘンリ一世の支配に服するまでは，「ウェールズの司教たちはセント・デイヴィズ司教によって聖別されていた。また，［セント・デイヴィズ］司教は［教会内の］司教選挙権を持つ人たちによって聖別され，他の教会［の人］に告白したり，服従することはなかった(47)。」

（4-6）サムソンからヘンリ一世による征服までの間に 19 人の司教がこの司教区を司った(48)。

（4-7）ウェールズがイングランド王権に服従してから今日までに 3 人の司教がこの司教区を管理した。ヘンリ一世が任命したバーナード，同じく王スティーブンによるデイヴィッド，および，ピーターである。「この 3 人は，王から強く求められたからであるが，いずれもカンタベリー［大司教］の聖別を受けて就任した(49)。」

（4-8）ヘンリ一世の時代以降カンタベリー大司教でウェールズを訪れたのは現在のボードウィンだけである。彼はウェールズの人々に十字軍参加を呼び掛け，すべての大聖堂教会でミサを行った(50)。

（4-9）「今日までセント・デイヴィズ司教区がカンタベリー［大司教］に従属することは一度もなかった。」この点はベダ（Beda）がその『教会史（Anglicana Historia）』で明らかにしている。彼は，初代のカンタベリー大司教オーガスチンがウェールズの全司教を招集した時に礼を失した接待をし，これを見た司教たちが直ちに帰国したこと，また，以後オーガスチンを自分たちの大司教と認めないと決めたことを記している(51)。

（4-10.）ウェールズにはかつて 7 人の司教がいたが，現在では 4 人しかいない。おそらく昔は今より多くの大聖堂があったのだろう(52)。

（4-11）大司教座の地位を失った後のセント・デイヴィズ教会で，その回復を表立って試みたのは司教バーナードのみである。彼は何度も慎重に準備された要請をローマ教皇に送り成功直前まで進んだが，教皇エウゲニウスの面前でイングランド王宮の代理人が，バーナードはカンタベリー大司教に服従を誓ったと証言したため，大司教になれなかった。バーナードはヘンリ一世と親密な関係を持ち，教会が平穏で豊かだった時期の司教であったにもかかわらず，成功しなかった。しかし，彼は自分の主張が正当であると確信していたので，ウェールズ各地を旅する時は大司教を示す十字架を掲げさせた(53)。

（4-12）ただし，バーナードは野心家で，ローマ教皇への要請を自分自身のために行い，セント・デイヴィズ教会の利益を軽視した。また彼は，先任司教の誰よりも教会財産を手放し，教会に損害を与えている(54)。

（4-13）今日のカンタベリー教会とセント・デイヴィズ教会を比較すると，前者が王の支持，大きな財産，文芸や法に通じた人材に恵まれているのに対し，後者にはこれらすべてが欠けている。しかも，この嘆かわしい状況を正そうとする意欲も見られない。

したがって，「いろいろな形で思わぬ時に発生する王国の大変動，あるいは教会の大変化でも起きないかぎり，［セント・デイヴィズ教会がかつての地位を］取り戻すのは極めて困難であろう(55)。」

ギラルドゥスは（4-1）から（4-13）でセント・デイヴィズ教会の歴史を簡単にまとめている。第2巻序文で現状を紹介し，第1章では歴史と展望を述べているといってもよい。書かれている事柄の大部分は同教会に古くから伝わっていた情報であるが，このように整理し，まとめ上げたのはギラルドゥスである。

以下いくつかの点について説明を加え，私の理解を付す。

（1）（4-2）ギラルドゥスは，聖デイヴィッドが大司教の地位を得た経緯について，リギヴァルフの伝記にはなかったエピソードを加えている。カエルレオンの大司教であった聖ドブリキウスがその地位を聖デイヴィッドに譲ったというのである。この記述について2点説明をしておこう。

①ドブリキウスは5世紀中葉に南東ウェールズで生まれ，ウェールズ，アイルランド，ブルターニュで活躍したと伝えられる聖人である。彼はその伝記がサンダフ教会の文書に残されていること，また，聖イスティッド（Illtud）伝にサンダフ司教であったと記されていることから推測して，サンダフ教会に関係の深い人物であった(56)。

②カエルレオンは南ウェールズ中部の古い町である。12世紀にはサンダフ司教区の支配下にあり，セント・デイヴィズとは地理的にも行政的にも関係の薄い土地である。

（2）（4-2）の後半でギラルドゥスは「その証拠は私の『聖デイヴィッド伝』に示されて

いる」と記し，『ウェールズ旅行記』の執筆時に『大司教聖デイヴィッド伝』がすでに完成していたような書き方をしている。しかし，今日の研究者の一致した理解では，前者の第1版は1191年に発表され，後者はおそらく1194年に書き上げられたと推測されている(57)。ギラルドゥスの記述はこの理解に反するわけで，この点をどう考えたらよいのか。

『ウェールズ旅行記』第1版のマニュスクリプトは3点現存しているが，いずれもオリジナル，すなわち，王子リチャードに献呈されたものではなく，13世紀に書かれたものと推定されている。しかし，最近の研究でこの3点のひとつ，British Library所蔵のRoyal 13 B. viii（マニュスクリプトR）はギラルドゥスの手元に置かれ，第1版発表後もギラルドゥスによって追記や訂正がなされたマニュスクリプトを伝えている可能性の高いことが分かってきた(58)。彼は一度完成した著作に繰り返し手を入れる癖を持っていたが，その痕跡がこのマニュスクリプトに伝えられているのである。とすれば，マニュスクリプトRの原本は『大司教聖デイヴィッド伝』が完成した時に未来形から過去形に書き換えられた可能性があり，私はそう考えている。

(3)（4-4）に記されているドルのサムソンはウェールズ出身で，6世紀前半にウェールズ，アイルランド，ブルターニュで活躍したことが分かっている(59)。したがって，彼は6世紀後半の聖デイヴィッドより前の人物であり，第25代の大司教ではありえない。（4-1）から分かるように，ギラルドゥスは同時代のセント・デイヴィズ教会が大司教座ではないことをよく知っていたから，聖デイヴィッドから始まった大司教の地位がどこかで失われた経緯を創出する必要があると考えて。（4-4）を組み入れたのであろう。

(4)（4-5）のような司教選出と聖別は，前節で述べたように，ウェールズで古くから行われていたもので，聖界のヒエラルキーが確立していない社会では自然な方法であった。ローマ教会とその一翼を担うカンタベリー教会の主張はこうした素朴な司教や大司教の在り方に対する挑戦であることをギラルドゥスはよく知っていたのである。

(5)（4-11）からギラルドゥスが司教バーナードの大司教座要求とその結果をよく知っていたことが分かる。ただし，おそらく彼が持っていた情報は教会メンバーの記憶のレヴェルにとどまり，まだバーナードと教皇庁が交わした文書は調査していなかったと思われる。彼が「セント・デイヴィズ問題」提起後にこうした文書を探索しているからである(60)。

本稿の目的に即して上記の（4-1）から（4-13）の内容を要約するならば次の3点となろう。①聖デイヴィッドは大司教ドブリキウスからその地位を譲り受け，セント・デイヴィズに大司教座教会を建立した。②その後第25代大司教サムソンが疫病を避けてブルターニュに渡り，ドルの司教となったため，セント・デイヴィズ教会に大司教がいなくなった。③しかし，この教会は大司教座であったことを忘れたわけではなく，11世紀初頭以

降その地位を回復しようとする試みがなされたが，12世紀末まで成功していない。

ギラルドゥスはこのように整理し，自分は現状を強く悲しむと述べながら，何か方策がないものかと訴えている。

リギヴァルフの『聖デイヴィッド伝』とくらべると，聖デイヴィッドが大司教の地位を得た経緯が違い，その後この地位が失われた経緯が加わっている。また，後者の追加によって現状認識が逆になっている。

1191年の段階でギラルドゥスが集めていた情報を以上のようにまとめることができるとして，問題はこれらが彼の目標達成にどれだけ役立つのか，より正確に言えば，彼がこれらの情報を基にイングランド王権のウェールズ聖界支配に対抗する論理を構築できるか，である。

出発点である現状認識は（4-13）で明らかのようにかなり暗く，積極的な作戦を立てられないでいたから，ギラルドゥスが手元の情報で充分だと考えていなかったことは間違いない。加えて，彼は自分がこの書で提示している新しい情報を信頼していなかった可能性が高い。少し説明しよう。

（4-2）に記された大司教の地位と権限の委譲はギラルドゥスの描く大司教座セント・デイヴィズ教会像の出発点であるが，その情報源はジョフレイ・オヴ・モンマス（Geoffrey of Monmouth）の『ブリタニア王国の歴史（Historia Regum Britaniae）』であり，ドブリキウスが大司教であったという伝承はほかにない。しかも，現在の研究者はジョフレイの記述の多くは創作であると考えている。実はギラルドゥス自身も，他の個所でジョフレイは歴史家として信頼できないと述べている(61)。ギラルドゥスの歴史像は最も肝心な点で信頼できない史料に依拠していることになる。

（4-4）のエピソードについても同様な問題がある。ギラルドゥスが聖サムソンをその伝承よりもはるかに後代の人と錯覚していたのだろうが，今日は無論，おそらくギラルドゥスの時代の人が見ても計算が合わないことはすぐに分かるはずである。したがって，彼の歴史像にとって中間の大きな画期となる大司教座喪失も史料的根拠を失うことになる。

なぜギラルドゥスはこのような無理をしたのか。推測の域を出ないが，一方で古来の大司教座権を主張し，他方で現在は大司教座ではないという事実を認めるのだから，かつて大司教座がセント・デイヴィズ教会にもたらされ，その後失われたというエピソードが不可欠だと考えたのではなかろうか。

このような状況であれば，（4-13）のように彼が何か大きな変化に，すなわち，自分の力ではなく，外部に生まれるかもしれない力に希望を託すほかないと考えたのはむしろ自然である。

ただし，もしこの推測に大きな誤りがなく，彼が手元の情報で確信の持てる論理を構築

できないと判断していたならば，それは彼が問題の核心を理解し始めていたことを示す。すなわち，古い慣習に基づく大司教の在り方と，ローマ教会を頂点とする聖界ヒエラルキーを後ろ盾としてイングランド王権が持ち込んだ司教・大司教の在り方とがせめぎあっていること，したがって，後者を克服する何か新しい論理がぜひとも必要であることに彼は気づいていた。残された道はバーナードのようにイングランド王権の頭越しにローマ教皇に訴え出ることであるが，これにはいくつかの条件と本人の勇気が必要であった。ギラルドゥスがバーナードは恵まれた条件を持っていたのに成功しなかったと述べているところに，私は彼の逡巡を感じる。

V 『セント・デイヴィズ大司教聖デイヴィッド伝』

本節はまずギラルドゥスが書いた『大司教聖デイヴィッド伝』の構成と内容を簡潔に紹介し，次いで彼の執筆意図について検討する。

この著作の原文タイトルを直訳すると，『ギラルドゥス・カンブレンシスによって翻案されたメネヴィア教会大司教聖デイヴィッドの生涯』である(62)。原本は言うまでもなくリギヴァルフの『聖デイヴィッド伝』である。いわゆるダイジェスト版ではなく，全体として書き直されているが，充分に照合可能である。

まず文体と構成について紹介する。

バートレット（Bartlett, R.）はリギヴァルフとギラルドゥスの文体を比較検討し，後者のほうが文筆家らしい技巧を凝らしていること，また，文体の違いが読者の内容理解に微妙な影響を与える場合があることを指摘している(63)。これは重要な指摘であるが，ラテン語理解に大きな限界を持つ私は，文体から生まれる細かいニュアンスまで追求することはできない。

全体構成を比較すると，『大司教聖デイヴィッド伝』の校訂本では，最初にタイトルが掲げられ，次いで序文（proemium）と 10 章（lectio）からなる本文が展開され，最後に返唱が記されている。『聖デイヴィッド伝』との構成上の違いは序文が追加されていること，および，本文が大くくりになっていることである。

次に内容について検討する。

序文の中でギラルドゥスは翻案の目的について，セント・デイヴィズ教会メンバーに求められてリギヴァルフの伝記を学識ある文章で書き直したのだと述べている(64)。教会の依頼を受けたのは事実であろう。しかし，この記述が彼の執筆意図の全体を伝えていると

考える必要はない。すでに『聖デイヴィッド伝』を所蔵する教会でその改定版をつくるのであるから，内容にかかわってギラルドゥス独自の意図があったと考えるのが自然である。

本文に関しては，リギヴァルフの伝記と重なるエピソードはその題目のみを記し，内容に違いのある記述や追加部分はやや詳しく紹介しる。

第1，2章には，神による聖デイヴィッド生誕の予告や父母の出会いなど，誕生までの経緯が記されている(65)。『聖デイヴィッド伝』の第1～第6節と重なる内容である。

第3，4章の内容は2つに分かれる。ひとつは，聖人の誕生，洗礼，養育，教育の様子であり。もう一つは聖デイヴィッドが成人後ウェールズ各地をまわって修道院をつくり，最終的にヴァリス・ロシーナに本拠となる修道院を建設するまでの経緯である(66)。ギラルドゥスは聖デイヴィッドの行動ルートを順次地名を付して語ることによって，聖人が南西ウェールズの人であり，本拠地がセント・デイヴィズに置かれたことを強調している。聖デイヴィッドと現存のセント・デイヴィズ教会の結びつきを明示するために細かい追記がなされているのである。リギヴァルフの伝記では第7～第32節に相当する。

第5から第7章には，聖デイヴィッドと彼の弟子たちが生み出した奇跡がまとめて紹介されている(67)。ただし，奇跡とは言えない聖デイヴィッドと弟子たちのエルサレム巡礼の話が第7章の末尾に置かれている(68)。

『聖デイヴィッド伝』の第33～第48節に相当するが，2つ相違点がある。ひとつはギラルドゥスの追加したエピソードで，セント・デイヴィズ教会に未完のまま放置されていた福音書が神の手で完成されたという奇跡である(69)。もうひとつは，第7章末尾のエルサレム巡礼のエピソードの中で聖デイヴィッドが授けられた地位が大司教ではなく，司教とされている点である(70)。

第8章のテーマはブレヴィの集会で，聖デイヴィッドが全ウェールズの大司教に就任した経緯が語られている(71)。リギヴァルフの伝記では第49～第54節に当たる。

ここでもいくつかギラルドゥス独自の内容や表現が見られる。まず，ブレヴィに集まったのは全ウェールズの聖・俗の支配者たちであったと記されていて，集会の決定が及ぶ範囲がリギヴァルフの伝記よりも縮小している(72)。ただし，この点は本稿第3節で触れたように，表現上の相違にすぎない。次に，ブレヴィの集りに先立って聖デイヴィッドが聖ドブリキウスから大司教の地位を譲られたと記され，したがって，集会はこれを追認ないし確認したことになっている(73)。

第9章は，ブレヴィの集会の後に開かれた「勝利の宗教会議」に関する記述で，ここで全ウェールズの聖職者たちによって定められた規律がローマ教会の承認を得たと記されている(74)。リギヴァルフの伝記では第55～第58節に当たる。

第10章は，聖デイヴィッドが自分の死を予告したこと，また，死去に際してブリテン，

アイルランドから多くの聖人が彼の教会に集まったことが記されている(75)。『聖デイヴィッド伝』の第59〜65節に当たる。

なお，『聖デイヴィッド伝』の第66〜第68節に相当する記述は『大司教聖デイヴィッド伝』にはない。これはリギヴァルフがいわば自己紹介している部分であるから削除されて当然である。

第1〜第10章の紹介を踏まえて，ギラルドゥスがどのようにリギヴァルフの伝記を書き直したのか，その意図は何だったのか推測してみよう。

まず，『大司教聖デイヴィッド伝』独自の記述を列挙する。

(1) ギラルドゥスは伝記のタイトルに「大司教」を入れている。読者は聖デイヴィッドが大司教であったことを前提として読み始めるわけで(76)，本文はタイトルのいわば論証部分となっている。

(2) ギラルドゥスは聖デイヴィッドが大司教の地位を取得した経緯を整理して，実質的にひとつに絞っている。少し説明しよう。

リギヴァルフは，聖デイヴィッドがエルサレムの総司教から大司教の地位を授けられたエピソードとブレヴィの集会で全ブリタニアの聖・俗の支配者たちの推挙によって大司教となったエピソードを併記し，両者の調整をしていない。

それに対して，ギラルドゥスは聖デイヴィッドがブレヴィの集会の前に聖ドブリキウスから大司教の地位を譲りうけ，これが集会で確認されたという筋立てになっている(77)。この地位譲渡は『ウェールズ旅行記』に簡潔に記されているが，背景への言及はなかった。聖ドブリキウスとブレヴィの集会を結びつけたのはギラルドゥスの工夫である。また，彼はエルサレム総司教が聖デイヴィッドに与えた地位を，大司教ではなく司教としており，ここでも重複が避けられている(78)。

(3) ギラルドゥスは聖デイヴィッドが活躍した場所を，名前だけでなく所在地まで記している。その結果，聖デイヴィッドが得た大司教の地位と権限が，彼の死後セント・デイヴィズ教会で代々受け継がれ，同教会が大司教座権を守ってきていると読者に確信させる筋書きになっている(79)。

(4)『大司教聖デイヴィッド伝』には『ウェールズ旅行記』に記されている聖サムソンのエピソード，すなわち，サムソンが大司教の祭服を持参してブルターニュに渡り，帰国しなかったという話が欠けている。

以上の4点をまとめると，聖デイヴィッドは聖ドブリキウスから大司教の地位を譲り受け，それがブレヴィの集会で確認された結果，セント・デイヴィズ教会は大司教座となり，その地位は12世紀まで継承されていることになる。他の研究者，たとえばエヴァンスも

同様に理解している[80]。

現状認識が『ウェールズ旅行記』と逆になっているが，これは『大司教デイデイヴィッド伝』が伝記であるといういわば制約に由来するものであり，ギラルドゥスが現状認識を変えたと理解するのは誤りである。聖サムソンのエピソードは聖デイヴィッドの死後のことであるから同書に組み込まなかったのであって，彼のセント・デイヴィズ教会史理解の中では依然として重要な意味を持っていた。この点は，次節で紹介するように，彼が教皇の前で同教会の歴史を説明した際に聖サムソンによる祭服移転に言及していることからも明らかである。

では，ギラルドゥスは『大司教聖デイヴィッド伝』で何を伝えようとしていたのか。

ひとつの手がかりは，序文が記しているように，セント・デイヴィズ教会のメンバーから同書の執筆が依頼されている点で，彼らが司教バーナードの時代以降何度か公の場で大司教座の復活を要請していることを考えると[81]，この点に資するよう書き直してほしいと依頼された可能性が高い。

もうひとつの手がかりは，数年後にギラルドゥスがローマ教皇の前で展開した議論であり，そこから推測すると，彼はこの書の翻案によってイングランド王権のウェールズ聖界支配をくつがえす論理を探っていたと考えてよい。

このような2つの目的をもって『大司教聖デイヴィッド伝』が書かれたとすると，ギラルドゥスは少なくとも2つの違った読者ないし相手を想定していたことになる。ひとつは言うまでもなくセント・デイヴィズ教会のメンバーであり，もうひとつはギラルドゥスが論破しなければならない相手，すなわちイングランド王宮である。そして，「セント・デイヴィズ問題」が提起された後はこれにローマ教皇が加わる。

以上の推測に大きな間違いがないとすれば，『大司教聖デイヴィッド伝』でギラルドゥスは，2つの基本的にスタンスの違う人々，とくに大司教座権をめぐっては明確に対立している人々を念頭に置いて執筆していたことになる。同書で展開すべき主張はいずれにむかってもセント・デイヴィズ教会の大司教座権回復であるが，一方はこれを求めている人々への論拠提供であり，他方はこれに反対している人々を説得する材料の探索である。

それだけではなく，両者が持っていた大司教のイメージが違っていた。セント・デイヴィズ教会のメンバーは古くからウェールズで共有されていた大司教イメージ，すなわち，聖・俗の支配者たちの集まりで選出されて聖界リーダーとなる大司教であり，他の司教たちとの関係は威信に基づく指導であった。これに対してイングランド王宮が持っていたイメージは，ローマ教皇を頂点とするヒエラルキーの構成要素としての大司教であり，また，国内では王権を支える重要な柱となる大司教であった。両者はまったく性格を異にしており，12世紀後半以降の政治変動の中で後者のイメージが力を増してきていた。そして，

ギラルドゥスはこうした状況を長い王宮生活で充分知っていた。

以上から，同じ聖デイヴィッド伝の執筆であっても，リギヴァルフに比べてギラルドゥスのほうが難しい課題を担っていたといってよいだろう。

リギヴァルフに伝記執筆を求めたのはセント・デイヴィズ教会とその後ろ盾であったウェールズ人支配者たちであり，彼らはイングランド勢力の侵攻に脅威を感じていたが，王権が持ち込もうとしていたローマ教会のヒエラルキーがどれほどの力を発揮するか充分に認識していなかった可能性が高い。彼らが重視したのは創始者の威信とその伝承であり，この点では自信を持っていた。彼らのキリスト信仰の方が古く，したがって，より大きな正統性をもっているのは確かだったからである。

これを受けてリギヴァルフは，セント・デイヴィズ教会が神の愛顧を受けた聖デイヴィッドによって創建され，イングランドの教会よりも古い伝統を持つ，したがって，イングランド勢力が侵入してもこれに屈服する必要はない，神が許すはずがない，と読者に伝えようとした。多くのエピソードの中で特に重要視されたのはブレヴィの集会であり，その後開かれた「勝利の宗教会議」はその確認に過ぎない。

これに対してギラルドゥスは，一方でセント・デイヴィズ教会がリギヴァルフ以降大切にしてきた論点を踏まえながら，他方でローマ教会のヒエラルキーの中でこの教会は独自の大司教座権を持ち，したがって，カンタベリー教会の支配を受ける必要がないという主張を打ち出さなければならなかった。彼は現実の聖界をよく知っていたから，セント・デイヴィズ教会と自分の主張が通るためにはイングランド王宮の大司教認識や教会組織と対決する必要があり，リギヴァルフの伝記だけでは対抗できないと判断していた。そこで彼は『大司教聖デイヴィッド伝』によってリギヴァルフの限界を乗り越える論拠を創出しようと考えたのである。

しかし，本節の紹介から分かるように，彼は新しい論拠を作り出せなかった。彼はリギヴァルフの説明を整理しているだけで，聖デイヴィッドが取得した大司教の地位・権限をローマ教会のヒエラルキーに位置付けることはできなかった。第 9 章でローマ教会の承認を得たと述べているが，具体的な状況をまったく記していない。これではイングランド王宮を説得できない。

ギラルドゥスはこの伝記を執筆する中で，イングランド王宮の説得をあきらめ，新しい交渉相手，すなわち，手元にある資料でセント・デイヴィズ教会の大司教座権を主張できる別の相手を探す必要があると気づいた可能性が高い。そして，ここまで考えを進めれば，カンタベリー教会を乗り越えるために，この教会が所属するヒエラルキーの頂点に立つローマ教皇と直接交渉するというアイディアに至るのは自然である。実際，司教バーナードによる先例があり，これを彼はよく知っていた[82]。

他方，このアイディアは王権への敵対を意味すること，また，それが彼にとって大変危険な試みであることもすぐに分かったはずである。当然アイディアを得た後も惑いは深かった。

しかし，1198年にセント・デイヴィズ司教選出の機会が訪れるまでに彼ははっきり決断していた。手元に集めた資料によって，すなわち，ローマ教会の組織とは別の，より古い大司教座権を根拠として「セント・デイヴィズ問題」を教皇インノケンティウス三世に提訴する決心を固めていた。

Ⅵ　おわりに

ギラルドゥスは1190年ころからセント・デイヴィズ教会の大司教座権に関する情報を集め，1198年までにひとつの主張にまとめ上げていた。

では，集めた情報はどれだけ役立ったのか。結論を言えば，主張を陳述するのには役立ったが，最終的な成果は全く得られなかった。

1200年に彼は「セント・デイヴィズ問題」をローマ教皇インノケンティウス三世に提起し，イングランド王権と対決したが，その際彼は第4，第5節で紹介したウェールズ教会史の知識を充分に活用している。セント・デイヴィズ教会を中心とするウェールズの教会は本来カンタベリー教会から独立した存在であったこと，独立性を失ったのはイングランド勢力が侵入した12世紀以降であることを教皇に詳しく説明している(83)。

説明の際に彼が懸念したのは，伝承に基づく部分の説明を教皇が検討に値すると受け止めてくれるかどうかだっただろう。しかし，教皇はギラルドゥスの主張によく耳を傾けてくれた。教皇がまず興味を示したのが聖サムソンによる大司教権の移転であったことから判断すると(84)，聖デイヴィッドの大司教就任に関して疑義を持たなかったと考えられる。また，ギラルドゥスに教皇庁の文書館で文書の調査を許していることも私の推測を支持してくれる(85)。ギラルドゥスの作戦は成功したかに見えた。

他方，イングランド王宮はカンタベリー大司教の代理をローマに送り，ギラルドゥスの主張を全面的に否定した。論理は簡明で，ウェールズはイングランド王国の一部であり，その司教たちを王が任命し，カンタベリー大司教が聖別するという慣行が確立していると主張し，譲らなかった(86)。ローマ教会のヒエラルキーを前提としたこの論理には，ウェールズ教会の古い伝統を強調する主張を受け入れる余地はない。

翌1201年に開かれた第2回審査になると状況は変わり，教皇はイングランド王権の不

利にならない範囲で事態を収拾しようとしていることが明らかになった。ギラルドゥスから見れば予想外の態度豹変である。実際，1203 年の第 3 回審査で出された裁定は彼に不利なものであった。セント・デイヴィズ司教の選挙はやり直すことになり，同教会の大司教座権は正式の議題とされぬまま審査が終了したのである。ギラルドゥスの完敗であり，以後この教会が大司教座権を主張することはなくなった。

註

第 1 節

(1)［53］永井。

(2)［60］永井，第 2 節。

(3)より詳しくは[52]永井を参照。

第 2 節

(4)以下の紹介は下記辞典を参考にしてまとめた。

［44］Dictionary of Welsh Bibliography down to 1940，pp. 107～108.

［45］The New Companion to the Literature of Wales，pp. 178～79.

［46］A Welsh Classical Dictionary，pp. 193～97.

［47］Encyclopedia of Wales，pp. 195～96.

(5)［53］永井，第 3 節。

(6)［30］Rhigyfarch（Wade-Evans（ed.，trans.）），pp. 150～70.［31］Rhigyfarch（James（ed.，trans.）），［32］Rhygyfarch（Sharpe & Davies（eds.，trans.））.

(7)［47］Encyclopedia of Wales，pp. 195～96.

(8)［3］Giraldus（Dimock（ed.）），［25］Giraldus（Thorpe（trans.））.

(9)［11］Giraldus（Brewer（ed.））.

(10)［25］Giraldus（Thorpe（trans.）），pp. 275～77.

(11)［33］Bartlett，p. 217.

(12)本稿第 4 節の史料（4-2）がその一例である。

(13)本稿第 5 節の註（62）を参照。

(14)本稿第 3 節の註（38）を参照。

(15)［45］The New Companion to the Literature of Wales，p. 633.

(16)［31］Rhigyfarch（James（ed.，trans.）），pp. xiv～xxix.

(17)［31］Rhigyfarch（James（ed.，trans.）），p. xxxii.

(18)［43］Sharpe，p. 104.

(19)［32］Rhygyfarch（Sharpe & Davies（eds.，trans.））.

(20)リギヴァルフとギラルドゥスの伝記を比較する作業は，半世紀以上前から教会史や聖人伝の研究者によってしばしば行われている。しかし，その多くは文献的検討あるいは表面的な比較にとどまり，2 人の執筆意図と関係づけている研究は，私の知る限りではあるが，以下の本文で紹介する 2 点のみである。

(21)［38］Evans.

(22)［40］Pryce.

(23)［53］永井。

(24)［52］永井。［54］永井。
(25)［58］永井。［60］永井。

第3節
(26)［32］Rhygyfarch（Sharpe & Davies（eds., trans.）），pp. 108～109.
Uita beati Dauid, qui et Dewi, episcopi et confessoris.（p. 108）
(27)［32］Rhygyfarch（Sharpe & Davies（eds., trans.）），pp. 108～17.
(28)［32］Rhygyfarch（Sharpe & Davies（eds., trans.）），pp. 116～121.
(29)［32］Rhygyfarch（Sharpe & Davies（eds., trans.）），pp. 120～25.
・・・・Dauid agio totam Rosinam Vallem perpetuo possidendem.（p. 122）
(30)［32］Rhygyfarch（Sharpe & Davies（eds., trans.）），pp. 124～31.
(31)［32］Rhygyfarch（Sharpe & Davies（eds., trans.）），pp. 130～39.
(32)［32］Rhygyfarch（Sharpe & Davies（eds., trans.）），pp. 138～41.
・・・・ad archiepiscopatum Dauid agium prouehit.（p. 140）
(33)［32］Rhygyfarch（Sharpe & Davies（eds., trans.）），pp. 142～47.
・・・・metropolitanus archiepiscopus omnium fieret consensus,・・・・qui a patriarcha episcopus factus.（p. 142）
・・・・ita ut quicunque eam regeret, archiepiscopus haberetur.（p. 146）
(34)［32］Rhygyfarch（Sharpe & Davies（eds., trans.）），pp. 146～49.
・・・・reglum Romana auctoritate acceperunt・・・・.（p. 146）
(35)［32］Rhygyfarch（Sharpe & Davies（eds., trans.）），pp. 148～51.
(36)［32］Rhygyfarch（Sharpe & Davies（eds., trans.）），pp. 152～53.
(37)［32］Rhygyfarch（Sharpe & Davies（eds., trans.）），pp. 152～55.
Archiepiscopus tocius Brittannie.（p. 152）
(38)［32］Rhygyfarch（Sharpe & Davies（eds., trans.）），pp. 154～55.
(39)シャープとデイヴィスの英訳は，はっきりとウェールズを指すとわかる個所は原語を離れて「ウェールズ」と表記している。
(40) ギラルドゥスもこの慣習に言及している。次節の史料（4-5）を参照。
(41)［36］Davies.

第4節
(42)以下の史料の中で，（4-1），（4-2），（4-4），（4-7），（4-11）は先行拙稿で紹介したことがある。［58］永井，第4節。
(43)［3］Giraldus（Dimock（ed.））, p. 101.｛25｝Giraldus（Thorpe（trans.））, pp. 159～60.
Quoniam igitur caput est Kambriae Menevia, et urbs olim metropolitans.
(44)［3］Giraldus（Dimock（ed.））, pp. 101～102.｛25｝Giraldus（Thorpe（trans.））, pp. 160～61.
Sicut Britanniae referent historiae , apud urbem Legionem・・・・beatus Dubricius, loci eijusden tunc temporis archiepiscopus, David・・・・cessit honorem：et ex tunc, procurante David, usque Meneviam sedis est translatio・・・・.
・・・・sicut de vita ipsius testator liber conscriptus.
(45)［3］Giraldus（Dimock（ed.））, p. 102.｛25｝Giraldus（Thorpe（trans.））, pp. 161～62.
(46)［3］Giraldus（Dimock（ed.））, p. 103.｛25｝Giraldus（Thorpe（trans.））, p. 162.
(47)［3］Giraldus（Dimock（ed.））, p. 103.｛25｝Giraldus（Thorpe（trans.））, p. 162.

(48) [3] Giraldus (Dimock (ed.)), pp. 103～104. {25} Giraldus (Thorpe (trans.)), p. 163.
(49) [3] Giraldus (Dimock (ed.)), p. 104. {25} Giraldus (Thorpe (trans.)), pp. 163～64.
Qui tres, regio urgente mandato, Cantuariae consecrationem susceperunt.
(50) [3] Giraldus (Dimock (ed.)), pp. 104～105. {25} Giraldus (Thorpe (trans.)), p. 164.
(51) [3] Giraldus (Dimock (ed.)), p. 105. {25} Giraldus (Thorpe (trans.)), p. 164.
(52) [3] Giraldus (Dimock (ed.)), p. 105. {25} Giraldus (Thorpe (trans.)), pp. 164～65.
(53) [3] Giraldus (Dimock (ed.)), pp. 105～106. {25} Giraldus (Thorpe (trans.)), p. 165.
(54) [3] Giraldus (Dimock (ed.)), p. 106. {25} Giraldus (Thorpe (trans.)), pp. 165～66.
(55) [3] Giraldus (Dimock (ed.)), p. 107. {25} Giraldus (Thorpe (trans.)), p. 166.
Quapropter, nisi per regnorum forte mutations, rerumque vicissitudines magnas, quae variis et inopinatis eventibus accidere solent, difficilis erit recuperation.
(56) [46] A Welsh Classical Dictionary, pp. 215～17.
(57) [33] Bartlett, pp. 216～17.
(58) [42] Roony, p. 103.
(59) [46] A Welsh Classical Dictionary, pp. 575～79.
(60) [53] 永井，第 7 節。
(61) [3] Giraldus (Dimock (ed.)), p. 58. {25} Giraldus (Thorpe (trans.)), pp. 117～18.

第 5 節
(62) [11] Giraldus (Brewer (ed.)), p. 327.
De vita S. Davidis Menevensis a Giraldus Cambrensis digetum.
(63) [34] Bartlett.
(64) [11] Giraldus (Brewer (ed.)), pp. 377～78.
(65) [11] Giraldus (Brewer (ed.)), pp. 378～82.
(66) [11] Giraldus (Brewer (ed.)), pp. 383～89.
(67) [11] Giraldus (Brewer (ed.)), pp. 390～99.
(68) [11] Giraldus (Brewer (ed.)), pp. 398～99.
(69) [11] Giraldus (Brewer (ed.)), p. 393.
(70) [11] Giraldus (Brewer (ed.)), p. 398.
・・・・patrem David divinitus electrum statim consecrado in episcopum debita solemnitate provexit.
(71) [11] Giraldus (Brewer (ed.)), pp. 399～401.
(72) [11] Giraldus (Brewer (ed.)), p. 399.
Universal totius Kambriae synodo colligendae.
(73) [11] Giraldus (Brewer (ed.)), p. 401.
・・・・cuiet honorem antea destination Dubricius cesserat, in Kambriae totius archiepicopum est.
(74) [11] Giraldus (Brewer (ed.)), pp. 401～402.
(75) [11] Giraldus (Brewer (ed.)), pp. 402～404.
(76) エヴァンスはこの書のタイトル自体が一つの問題提起になっていると述べている。[38] Evans, p. 28.
(77) プライスは，このような筋立をギラルドゥスが作ったのは，文書史料によって聖デイヴィッドの大司教就任を明示するためだったと述べている。[40] Pryce, pp. 24～25.

(78)［40］Pryce，p. 24.
(79)［38］Evans，p. 29.
(80)［38］Evans，p. 31.
(81)［5］Giraldus（Brewer（ed.）），p. 40.［29］Giraldus（Butler（ed.，trans.）），p. 58.［42］Richter，p. 58.
(82)ギラルドゥスは教皇をどのように説得しようと考えたのか記していない。しかし，後に彼が展開した議論から推測すると，ひとつは，この大司教座権の問題を解決する権限と実力を持っているのは教皇だけであると指摘すること，もうひとつは，歴代の教皇がセント・デイヴィズ教会をはじめとするウェールズの教会をどのように位置づけてきたか文献調査をさせてほしいと請願することであった可能性が高い。［53］永井，第6，第7節。

第6節
(83)［10］Giraldus（Brewer（ed.）），pp. 169～176.［42］Richter，pp. 113～14.
(84)［10］Giraldus（Brewer（ed.）），pp. 165～167.［29］Giraldus（Butler（ed.，trans.）），p. 182～84.
(85)［53］永井，第9節。
(86)［53］永井，第6，第7節。

参照文献

Ⅰ　史料
（A）ギラルドゥスの著作と訳本
［1］Giraldus Cambrensis：Topographia Hibernica（in Dimock，James F.（ed.）：*Opera Giraldi Cambernsis,* vol. 5，H. M. S. O.，1867）（『アイルランド地誌』）
［2］Giraldus Cambrensis：Expugnatio Hibernica（in Dimock，James F.（ed.）：*Opera Giraldi Cambrensis,* vol. 5，H. M. S. O.，1867）（『アイルランド征服』）
［3］Giraldus Cambrensis：Itinerarium Kambriae（in Dimock，James F.（ed.）：*Opera Giraldi Cambrensis,* vol. 6，H. M. S. O.，1868）（『ウェールズ旅行記』）
［4］Giraldus Cambrensis：Descriptio Kambriae（in Dimock，James F.（ed.）：*Opera Giraldi Cambrensis,* vol. 6，H. M. S. O.，1868）（『ウェールズ案内』）
［5］Giraldus Cambrensis：De Rebus a se Gestis（in Brewer，J. S.（ed.）：*Opera Giraldi Cambrensis,* vol. 1，H. M. S. O.，1861.）（『自叙伝』）
［6］Giraldus Cambrensis：Gemma Ecclesiastica（in Brewer，J. S.（ed.）：*Opera Giraldi Cambrensis*，vol. 2，H. M. S. O. 1862）（『教会の宝石』）
［7］Giraldus Cambrensis：De Principis Instructione（in Warner，George F.（ed.）：*Opera Giraldi Cambrensis*，vol. 8，H. M. S. O. 1891）（『君主の訓育』）
［8］Giraldus Cambrensis：Symbolum Electorum（in Brewer，J. S.（ed.）：*Opera Giraldi Cambrensis*，vol. 1，H. M. S. O.，1861）（『抜粋文集』）
［9］Giraldus Cambrensis：Speculum Ecclesiae（in Brewer，J. S.（ed.）：*Opera Giraldi Cambrensis*，vol. 4，H. M. S. O.，1873）（『教会の鑑』）
［10］Giraldus Cambrensis：De Jure et Statu Menevensis Ecclesiae，Dialogus（in Brewer，J. S.（ed.）：*Opera Giraldi Cambrensis*，vol. 3，H. M. S. O. 1863）（『セント・デイヴィズ教会の権利と地位』）
［11］Giraldus Cambrensis：Vita Sancti Dividis Menevensis Archiepiscopi（in Brewer，J. S.（ed.）：*Opera Giraldi Cambrensis* vol. 3，H. M. S. O.，1863.）（『セント・デイヴィズ教会大司教聖デイヴィ

ッド伝』）

[12] Giraldus Cambrensis: De Vita Galfredi Archiepiscopi Eboracensis (in Brewer, J. S. (ed.): *Opera Giraldi Cambrensis*, vol. 4, H. M. S. O., 1873.)（『ヨーク大司教ジョフレイ伝』）

[13] Giraldus Cambrensis: Vita Sancti Ethelberti (in Brewer, J. S. (ed.): *Opera Giraldi Cambrensis*, vol. Ⅰ, H. M. S. O., 1861)（『聖エセルベルトウス伝』）

[14] Giraldus Cambrensis: Vita Sancti Remigii (in Dimock, James F. (ed.): *Opera Giraldi Cambrensis,* vol. 7, H. M. S. O., 1877)

[15] Giraldus Cambrensis : Vita Sancti Hugonis (in Dimock, James F. (ed.): *Opera Giraldi Cambrensis*, vol. 7, H. M. S. O., 1877)

[16] Giraldus Cambrensis, (Scott, A. B. & Martin, F. X. (ed., trans.)): *Expugnatio Hibernica, The Conquest of Ireland*, Royal Irish Academy, 1978.（『アイルランド征服』）

[17] Giraldus Cambrensis (Bartlett, Robert (ed., trans.)): *Instruction for a Ruler, De Principis Instructione*, Clarendon press, 2018.（『君主の訓育』）

[18] Giraldus Cambrensis (Davies, W. S. (ed.)): De Invectionibus/The Book of Invectives of Giraldus Cambrensis, *Y Cymmrodor*, vol. xxx, 1920.（『論駁』）

[19] Giraldus Cambrensis (Lefevre, Y. & Huygens, R. B. C. (eds., trans.)): *Speculum Duorum, or a Mirror of Two Men*, University of Wales Press, 1974.（『二人の鑑』）

[20] Giraldus Cambrensis: Topography of Ireland (in Wright, Thomas (ed.), Forester, Thomas & Hoare, Richard Colt (trans.): *The Historical Works of Giraldus Cambrensis*), H. G. Bohn, 1863.（『アイルランド地誌』）

[21] Gerald of Wales, (O' Meara, John (trans.)): *The History and Topography of Ireland*, Penguin Books, 1951.（『アイルランド地誌』）

[22] ギラルドゥス・カンブレンシス,（有光秀一訳）:『アイルランド地誌』, 青土社, 1996 年。

[23] Giraldus Cambrensis: The Vaticinal History of the Conquest of Irelamd (in Wright, Thomas (ed.), Forester, Thomas & Hoare, Richard Colt (trans.): *The Historical Works of Giraldus Cambrensis*), H. G. Bohn, 1863.（『アイルランド征服』）

[24] Giraldus Cambrensis: The Itinerary through Wales (in Wright, Thomas (ed.), Foster, Thomas & Hoare, Richard Colt (trans.): *The Historical Works of Giraldus Cambrensis*, H. G. Bohn, 1863)（『ウェールズ旅行記』）

[25] Giraldus Cambrensis: The Journey through Wales (in Thorpe, Lewis (trans.): *The Journey through Wales and The Description of Wales*, Penguin Books, 1978.（『ウェールズ旅行記』）

[26] Giraldus Cambrensis: The Description of Wales (in Wright, Thomas (ed.), Foster, Thomas & Hoare, Richard Colt (trans.): *The Historical Works of Giraldus Cambrensis*, H. G. Bohn, 1863)（『ウェールズ案内』）

[27] Giraldus Cambrensis: The Description of Wales (in Thorpe, Lewis (trans.): *The Journey through Wales and The Description of Wales*) Penguin Books, 1978.（『ウェールズ案内』）

[28] Giraldus Cambrensis (Rutherford, Anne (ed., trans.)): "*I, Giraldus*", *The Autobiography of Giraldus Cambrensis* (*1145～1223*), Rhwymbooks, 2002.（『自叙伝』）

[29] Giraldus Cambrensis (Butler, H. E. (ed., trans.)): *The Autobiography of Gerald of Wales*, The Boydell Press, 2005, (orig. 1937)

[30] Rhigyfarch (Wade-Evans, A. W. (ed.)): Vita Sancti Dauid (in Wade-Evans, A. W. (ed.): *Vitae Sanctorum Britanniae et Genealogiae*, Univrsity of Wales Press, 1944).

[31] Rhigyfarch (James, J. W. (ed., trans.)): *Rhigyfarch's Life of St. David*, University of Wales

Press, 1967.
[32] Rhygyfarch (Sharpe, R. & Davies, J. R. (eds., trans.)): Rhygyfarch's Life of St. David, (in [37])

Ⅱ 研究文献（本稿で言及したもの）

[33] Bartlett, Robert: *Gerald of Wales, 1146～1223*, Clarendon Press, 1982.
[34] Bartlett, Robert: Rewriting Saints Lives, the case of Gerald of Wales, *Speclum*, vol. 58-3, 1983.
[35] Charles-Edwards, T. M.: Seven Bishop-Houses of Dyfed, *Bulletin of the Board of Celtic Studies*, vol. 24-2, 1971.
[36] Davies, J. Reuben: The Archbishopric St. David's and the Bishop of Clas Cynidr (in [37])
[37] Evans, J. Wyn & Wooding, Jonathan M. (eds.): *St. David of Wales, Cult, Church and Nation*, Boydel Press, 2007.
[38] Evans, J. Wyn: Transition and Survival, St. David and St. David's Cathedral. (in [37])
[39] Henley, George & McMullen, A. Joseph (eds.): *Gerald of Wales, New Perspectives on a Medieval Writer and Critic*, University of Wales Press, 2018.
[40] Pryce, Huw: Gerald of Wales and the Welsh Past. (in [39])
[41] Richter, Michael: *Giraldus Cambrensis, the Growth of the Welsh Nation*, Aberystwyth, 1972.
[42] Rooney, Catherine: The Early Manuscripts of Gerald of Wales. (in[39])
[43] Sharpe, Richard: Which Text is Rhigyfarch's Life of St. David ? (in [37])

Ⅲ 辞典類

[44] *The Dictionary of Welsh Biography down to 1940* (Lloyd, J. E. & Jenkins, R. T. (eds.)), The Honourable Society of Cymmrodorion, 1959.
[45] *The New Companion to the Literature of Wales*, (Meic Stephens (ed.)), University of Wales Press, 1988.
[46] *A Welsh Classical Dictionary, People in History and Legend up to about A.D.1000*, (Bartrum, P. C. (ed.)) The National Library of Wales, 1993.
[47] *The Welsh Academy Encyclopedia of Wales* (Davies, J. et al. (eds.)) University of Wales Press, 2008.
[48] *An Historical Atlas of Wales from Early to Modern Times* (Rees, William (ed.), Faber & Faber, 1959.

Ⅳ 拙稿（本稿に関連するもの）

[49] 永井一郎「『ウェールズ案内』におけるギラルドゥス・カンブレンシスの二元性」,『国学院経済学』第 57 巻 3・4 号，2009 年。
[50] 永井一郎「ギラルドゥス・カンブレンシスと 12 世紀南ウェールズの政治世界（Ⅰ），（Ⅱ）」『国学院経済学』第 59 巻 1 号，2010 年，第 59 巻 2 号，2011 年。
[51] 永井一郎「ギラルドゥス・カンブレンシスの自己認識とウェールズ評価（Ⅰ），（Ⅱ）」『国学院経済学』第 59 巻 3・4 号，2011 年，第 60 巻 2 号，2012 年。
[52] 永井一郎「ギラルドゥス・カンブレンシスのキャリア・デザイン（Ⅰ），（Ⅱ）」『国学院経済学』第 62 巻 2 号，2014 年。第 62 巻 3 号，2014 年。

[53] 永井一郎「ギラルドゥス・カンブレンシスとセント・デイヴィズ問題（Ⅰ），（Ⅱ），（Ⅲ）」『国学院経済学』第 63 巻 1 号，2014 年，第 63 巻 3・4 号，2015 年，第 64 巻 1 号，2015 年。
[54] 永井一郎「ギラルドゥス・カンブレンシスと『ブレコン大助祭問題』（Ⅰ），（Ⅱ）」『国学院経済学』第 64 巻 2 号，2015 年，第 64 巻 3 号，2016 年。
[55] 永井一郎「『ウェールズ案内』を読み直す－著者ギラルドゥスの執筆意図を手がかりに（Ⅰ），（Ⅱ）」『国学院経済学』第 65 巻 1 号，2016 年，第 65 巻 2 号，2017 年。
[56] 永井一郎「『アイルランド地誌』を読む－ギラルドゥス・カンブレンシスの執筆意図にかかわらせて」『国学院経済学』第 66 巻 2 号，2017 年。
[57] 永井一郎「『アイルランド征服』を読む－ギラルドゥス・カンブレンシスの執筆意図とかかわらせて（Ⅰ），（Ⅱ）」『国学院経済学』第 67 巻 1 号，2018 年，2 号，2019 年。
[58] 永井一郎「『ウェールズ旅行記』に見られるギラルドゥス・カンブレンシスの政治的スタンス」『国学院経済学』第 68 巻 1 号，2019 年。
[59] 永井一郎「ギラルドゥス・カンブレンシスの帰属意識」『国学院経済学』第 69 巻 1 号，2020 年。
[60] 永井一郎「『君主の訓育』第 1 巻を読む－1190 年代前半のギラルドゥス・カンブレンシス」『国学院大学経済学』第 69 巻 2 号，2021 年。